

2021

第106号 令和2年6月20日



利根山光人
生誕 100 周年

利根山光人

Toneyama Kojin

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

令和2年度
中期企画展
のお知らせ

利根山光人 —戦中派の証言 ふたたび— 戦争シリーズを中心とした所蔵作品展 令和2年6月20日(土) - 8月27日(木)

「無言館」は長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館である。自称「利根山先生の不肖の教え子」という館主窪島誠一郎氏は『利根山光人の遺言』というタイトルで、「無言館の建設は恩師が私に与えてくれた大切な宿題だったのではないかと、最近しみじみと思うのである。」と書いている。

利根山光人はたびたびこの上田を訪れ窪島氏に、そして丸木位里・俊夫婦の沖縄戦の図で有名な沖縄の佐喜眞美術館々長の佐喜眞道夫氏に出会ったことが縁となり、そこで大規模な利根山光人展が開催されている。

平成15年に当美術館で開催された企画展「戦中派の証言展」は、佐喜眞美術館で展示された作品が出品された。また、平成28年にもこれら戦争シリーズは新所蔵作品展として公開されている。

今回「戦中派の証言展ふたたび」と題し、改めて「戦争シリーズ」10点を展示する。

自身も学徒動員の一人で多くの画友を失い、生き残った者の鎮魂の思いとして作品化したというこれら大作の版画シリーズを改めて検証し、再評価していただければありがたい。



ヒロシマシリーズ A.M.8.15

※予定を変更し、本企画展を開催します。当初予定していた阿部夏希展は次年度以降の開催となります。

令和2年度絵画教室開講！ 6月13日(土)

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、大事を取って2か月遅れの開講となりました。

受講生も6名と例年より少ない人数でのスタートですが、密集状態は避けられ、ゆったりとしたスペースを取って対象に向き合うことができている。

スケッチブックの真っ白な一ページ目の新鮮な感動を忘れず、互いによい刺激を与え合いながら絵画を愛する気持ちを高めていってほしいものです。

教室は10月まで計10回実施の予定で、菊地仁美専任研究員が講師を務めます。



～@TONE美～ 『太郎さんと光人さん』 その2

(前号からの続き)

両氏ともマヤやアステカなど古代メキシコへの深い興味は言うまでもないが、さらには日本の古代文明にスポットライトを当てている。

光人さんは「なんとヴァイタルなのだ！」と好奇の眼を輝かせながら、福岡や熊本を中心として点在する古墳壁画をスケッチして歩き、「装飾古墳」というスケッチ画集、豪華本を出版している。

太郎さんは言わずと知れた縄文土器の美、再発見の第一人者である。

縄文土器を美術的な視点で言及したのは太郎さんが初めてで、その形の異様さにこう叫んだという。

「なんだこれは!？」

今でこそ縄文ブームで特別展も各地で開催されているが、その火付け役は何を隠そう太郎さんだったのだ。

二人とも古代人の造形的素質のみならず、次元を超えた空間性、そして宇宙観を土台とした社会的、哲学的な解釈に至っている。

太郎さんはフランスのソルボンヌ大学で民族学を修めているので、そうしたことが論考のバックボーンとなっていると思われる。

光人さんの書く文章にもいたるところに「民族のエネルギー」「呪術的」「土俗的」という言葉が出てきて、どちらも時代を経て現代に近づくとつれ、機械文明の中で生命力を失い軟弱化した人間や現代美術への警鐘へと繋がっている。

「太陽」というキーワードで太郎さんと光人さんを追ってみたい。

日本で最も印象的で有名なモニュメントは太郎さん作の「太陽の塔」であろう。1970年の大阪で開催された万国博覧会の記念モニュメントである。「とにかくべらぼうなものを作ってやる」と言って構想を練り、完成後は賛否両論の嵐だった。この造形物の頂点には金色の丸い顔が、さらに胴体部中央にも何やら渋い表情をした顔が彫刻してあり、このどちらが「太陽」なのかは別にして、とにかく「太陽」と言えば顔なのだ。

光人さんは「太陽の画家」と呼ばれた。メキシコのメテペック地方の素焼きの「太陽のマスク」は、当美術館のシンボルマークとして扱われている。



太郎さんの絵や彫刻と同様、丸い形態があると思えば顔が描かれていることが多く、単純化された目鼻口はほとんど太郎さんのものと見間違えるくらいにそっくりだ。油彩の大作「日輪」が放つエネルギー量はすごく、鹿踊りの背景にキラキラと太陽が照りつけている。

光人さんには「日輪」というタイトルの絵や版画が多い。北上駅改札上の大陶壁画も然り。ここには明らかに太陽ではあるが不思議なえぐれ方をしている。他の大作にもこの不自然にも歪(いびつ)な形態があり、「なぜ太陽がこんな形をしていなくてはならなかったのだろうか。」と、素朴な疑問が沸き起こる。

古代マヤにもそのルーツは今のところ探り当てられず、館関係者が抱える一つのミステリーでもある。太陽に顔が描かれるのはメキシコがルーツかもしれない。

確かに、この連載の冒頭で述べた両氏の写真のエネルギーギッシュな表情は、太陽に顔・・・というより顔そのものが太陽であることを証明しているとも言える。(次号に続く)

専任研究員